

# 中間看護管理者の看護管理情報活用力尺度の開発

伊津美 孝子<sup>\*,\*\*</sup>, 真嶋 由貴恵<sup>\*\*</sup>

## Development of the Nursing Management Information Utilization Ability Scale of the Middle Nursing Manager

Takako IZUMI<sup>\*,\*\*</sup>, Yukie MAJIMA<sup>\*\*</sup>

### 1. はじめに

超高齢社会に突入したわが国は、社会保障費の増大や生産年齢人口の減少など、さまざまな課題に直面しており、これらの課題を解決し経済成長を成し遂げるとともに、社会課題解決先進国として国際社会に貢献することが重要である。そのためには、国民の健康を維持・増進し、高齢者等の社会参加を可能とする社会の構築が有効である<sup>(1)</sup>。「高齢になっても自立的に暮らす」ことを可能にするためには、「病院完結型」の医療から、「地域完結型」の医療・介護、地域包括ケアへと転換する国の医療政策とも整合を図りつつ、質の高い医療・介護サービスの提供を行う<sup>(2)</sup>ための電子化と情報共有は必須である。

2010年内閣府IT戦略本部は、「シームレスな地域医療連携の実現」を目指すためには、「病院でのIT化、すなわち電子カルテの導入が必須となる」と報告した。病院における電子カルテの導入率は年々上昇しており、平成26年厚生労働省の報告では、一般病院34.2%、(病床数400床以上77.5%、200~399床未満で50.9%、200床未満24.2%)である<sup>(3)</sup>。

以上のように、地域や医療の電子化が進むなか、病院内で勤務する最も人数の多い看護師の情報リテラシーの強化は喫緊の課題といえる。

なかでも一看護単位を管理する中間看護管理者(看護師長、看護主任など)は、日々集積する多種多様な

情報を取り扱っており、そのなかからタイムリーに必要な情報を分析し、看護実践に活かすための看護管理情報活用力を強化していく必要がある。しかし、30代が中心の中間看護管理者の多くは情報教育を受けていない世代であり、ICT機器への苦手意識や適切な情報収集手段の把握不足があること、看護管理の視点から「問題を解決するために必要な情報は何か」など、実践現場で模索していることが、すでに明らかとなっている<sup>(4)~(6)</sup>。

看護師の情報処理能力については、Staggerらが、看護師を初心者、スタッフ、エキスパート、プロフェッショナルと四つのレベルに分けて、情報処理に関するコンピテンシーについて報告している<sup>(7)</sup>。

また、菖蒲澤らは、中間看護管理者の情報処理能力の習得と背景要因について、コンピュータスキルは、日常のコンピュータの使用や導入されたシステムをよく利用し慣れることで身につくが、情報の知識については教育の必要性があること報告している<sup>(8)</sup>。

さらに、菖蒲澤らは、管理者の持つ情報処理能力の因子について、「ネットワーク・コンピューターリテラシー」、「看護情報システムの利用」、「患者データの活用」、「モニタリングシステムの利用」の4因子を明らかにしている<sup>(9)</sup>。

そして、木村らは、中規模病院の看護管理組織に求められる医療情報スキルとして、「情報セキュリティスキル」、「基本的パソコンスキル」、「インターネット

\* 森ノ宮医療大学保健医療学部 (Faculty of Health Sciences, Morinomiya University of Medical Sciences)

\*\* 大阪府立大学大学院工学研究科 (Graduate School of Engineering, Osaka Prefecture University)

受付日: 2016年12月26日; 再受付日: 2017年2月28日; 採録日: 2017年4月24日